
時の訪問者

燐道 煉歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の訪問者

【著者】

Z4535Y

【作者略】

燐道 煉歌

【あらすじ】

時を自由に行き来できる少年、レラン。

時の神様である少女、グラミリア。

グラミリアの一言により、レランの運命の歯車が回り始める・・・

そんな、ファンタジーライトノベル。

動出した歯車（前書き）

この作品のキャラクターのイメージはヤマハが発売している、V0 CALOHDをイメージして作っています。

動き出した歯車

「」は神の空間。

名前の通り、神の住む空間である。

神の住む空間には神しか住むことができない。

例外もあるが・・・

* レラン、神の空間にて*

「ふわあ・・・あーダルい」

僕はでかいあくびをしながらそう言つた。髪様・・・じゃなかつた。神様からいきなり呼び出しをくらつたのだ。

本当だつたら無視するところだが、何せ相手が悪い。時の神様。

人間界でいう自分の上司みたいなヤツだ。

怒つたりしたら面倒なことになるからしぶしぶ、時の神様のいる所に向かっている。

「何が、大至急来い！だよ・・・」

彼女（時の神様）は、大至急来いだの言つても、実際大したことの無いことで呼ぶ。

歩いている内に時の神様のいる所に着いた。

* レラン、神の空間、時の空間にて*

神の空間といえどもそれは、全部の空間のことをひっくるめて神の空間と言つ。

実際にはもつと細かく分かれる。花の空間だの、音の空間だの・・・。その中で一番重要な空間・・・それが、

『時の空間』だ。

すべての時間をここで監視している。ここでの空間が乱れるようなことがあつたら一大事だ。

もし、そんなことがあつたら人間界の時間だけでなく、神の空間の時間までもが乱れてしまう。

そんな、時の空間に僕は入つていつた。

「失礼しまーす」

僕はそつと空間に入つていつた。イメージ的には、空間というよりも部屋かもしけないが。

「遅い！大至急来いと言つたでしょ！」

そう言つてきたのは、時の神様。グラミリアと呼ばれている。

「だつて、グラミリアが呼ぶときつて・・・」

「グラミリア様」ね。もしくは、時の神

「はいはい・・・で、何の用でござりますか」

僕は早く用事を済ませたいので、適当に返事をしておいた。

「緊急事態よ」

そう、グラミリアは言つた。何時も以上に顔が真剣だ。どうせ、またペットが逃げただの、仕事が終わらないだの・・・そういうことかと思っていた。そう、この時までは・・・。

動き出した歯車（後書き）

初めまして、**燐道**リンドウ **煉歌**レンカです。このサイトでの執筆はこの作品が始めてとなります。超がつくほど、素人ですがよろしくお願いします。

任務

「緊急事態つて・・・また、仕事貯めたんですか？」

僕はそう訊ねたが、彼女は僕の言葉を聞いて怒った。

「そんなのだつたら何百倍もマシよ！」

彼女がそういうことを言つのはすくめずらしい。

何処かにでも頭をぶつけたのだろうか。

「頭はぶつけてないから安心して」

彼女は読心術でも使えるのだろうか。

「顔にそんな感じのことが書いてあるわよ・・・さて、[冗談はここまで]

目つきと、その場の空気が変わった。

「偽りの神が復活したの」

僕は氷ついた。手や足が動かない。

「信じられないだろう・・・だけどこれは事実だ」

「何故・・・何故、アイツが復活したんですか！？アイツは・・・

偽りの神・・・それは、この世の全ての時を狂わせようとした偽者の神だ。

時の神様に匹敵する力を持つており、時の神様は偽りの神のせいで、3年間

戦いの傷を癒すために眠つていた。時の神様を大怪我させた強敵だ。

「ああ、私が10年前に封印した」

「では何故！！」

「どうやら、何者かが封印を解いたらしい」

「あの封印をですか！」

「ああ。問題はそれだけじゃない」

偽りの神が復活しただけでも大問題なのに・・・問題が山積みだ。

「時間をつかさどる妖精達が、偽りの神に記憶を消された。

そして、時のバランスを保つ歯車が消失してしまったの」

「消失・・・消えてしまつたんですか！？」

「一時的にね・・・でも、妖精達は自分の持つ歯車を再生することが出来る

から、そこは問題ないわ」

僕はそれを聞いて少しだけ安心した。

「妖精達は記憶を失い、人間の姿となつて普通に人間界で生活して

るの」

「僕、妖精達が人間の姿になつてゐるの見たことないんですけど・・・」

「私も無いわ」

キッパリと断言された。

「でも、レラン。貴方なら妖精達を探すことが出来る。時の訪問者の力で」

「つまり・・・時を渡つて、妖精達を救えと。そして歯車を再生させろ。

ということですか？」

「分かつてゐるじゃない。そういうことより、これは貴方にしか頼めないことよ。

お願ひ！」

「お願ひじゃなく、命令すればいいのでは？」

時の神様に僕みたいな神でもないモノが逆らえるはずがないのだから。

「それもそうね。まあ、とにかく頼んだわ。一刻を争う事態だから

「了解しました」

そうして僕の時を渡る、時の訪問者としての任務が始まった。

任務（後書き）

謎に包まれてる部分が多い・・・と思いますが、
その内、少しずつ明かしていくつもりです。

導かれた場所は・・・

* レラン、時の狭間にて*

「さて、任務開始としますか」

僕はそれなりの装備をし、時の狭間に来た。

時の狭間では未来にも過去にも行くことが可能だ。

だが、行くのには注意がいる。余計なことを喋らないことだ。

余計なことを喋り、未来が変わってしまったことがある。

そのようなことがおこると、時の軸が歪んでしまう。

絶対にあつてはならない。

「時の歯車と妖精たちの居場所を教えたまえ・・・ 時渡りの鍵よ!」

妖精探しをするのに重要なのが、時渡りの鍵だ。

これは、時の歯車と妖精の力に惹かれて一筋の光を放つ鍵である。

呪文を唱えたら、とある場所に光が放たれた。

「最初の場所は・・・まあ、とりあえず行ってみますか!」

光に導かれるようにして、人間界に降りていった。

* レラン、人間界にて*

「・・・何処だよここは」

降りたところは周りを見渡すかぎり、木、木、木。

みごとに木しかなかつた。

「木ばつか・・・つまりは、森にいるのか?」

ここまで木が多いと森にいると思われる。

「るりら・・・るりら・・・」

かすかだが、歌声が聴こえた。僕は歌声の聴こえる方へと歩いていった。

* レラン、人間界、とある花畠にて*

たどり着いた場所は花畠だった。とても沢山の花がある。

そして色とりどりだ。その花畠の中心には一人の女性がいた。

歌声は綺麗だが、表情は何だか暗かつた。

「あの女人可哀想だよね」

木に留まっていた小鳥がそう呟いた。

「それはどういうことなの？」

僕は小鳥に小声で聞いてみた。

「ひやあ！・・・君、私の声が分かるの？」

「分かるさ。僕は人間とはちがうから」

「その気配・・・時の訪問者ですか？本当に実在したんだー・・・。

神様に

近い力を持っているから、私の声が聞こえるのね

「まあね。で、何であの人人が可哀想なの？」

僕はそのことが、すごく気になった。

「彼女はね、2ヶ月前にこの花畠に来たの。でも、彼女には自由がないのよ」

「自由がない？」

「ええ。主人に、この花畠を見守つて言われてるらしいのよ。そんな必要ないのに

「見守るつて・・・1日中？」

「一日中ずーっとよ。彼女は寒さとかを感じないっぽいのよね。不思議よ」

「何であの花を見守つてるの？」

「本来はそんな必要ないのよ。あの花畠は、命を育んでるつていう伝説があるけど、

アレは嘘なのよ。それよりも、あの子ずっと何も食べてないの。丈夫なのかしら？」

小鳥の話を聞いて、彼女は妖精だということがはつきりした。妖精は人間みたいに食べたり飲んだりしなくて平気だし、暑さや寒さもあまり感じない。

でも・・・・・。

何故彼女はこの場所に連れてこられたのだろうか？彼女が不必要になつたのなら、別にここでなくてもいいはずだ。その部分には深い理由がありそうだ。

導かれた場所は・・・（後書き）

妖精さん登場！

でも喋つてないよねww

妖精の詳しいことは次回分かる・・・かも？

小鳥さん、この森の近くに街つてある?」

僕は聞いてみた。何せこの世界に来たばかりだから情報が足りない。「街? えーっと、この森を北に抜けるとあるよ。あ、北つてこっちね」

小鳥は親切に教えてくれた。何て優しいんだ・・・。

「あ、ねえ私もついて行つていい? この森つて結構広いから同じ所に戻つてくるのは大変だし、

この森から久しぶりに出たいんだ!」

「ん、いいよ。じゃあ僕の肩に止まつてて」

そういうと素直に僕の肩に乗つかつた。

* レラン、ソルフィン国、レラーニア街にて*
街に着くまでに小鳥さんには、いろいろと教えてもらつた。国名の名前、向かっている街の名前や文化など。小鳥さんの名前も教えてもらつた。ミレクラというらしい。「ここがソルフィン国で一番大きな街、レーラニアです!」見渡す限り、人しかいなかつた。市場で賑わつてたり、芸をしている人もいた。

「ここなら情報も集まりそうだな」
そして情報収集することにした。

聞いていくうちにいろんなことが分かつた。

僕がいた森は『静まりの森』と呼ばれている。

そこにある花畠は『命を育む』という伝説があるらしい。だから人々は花畠を大切にしているんだそうだ。

そして、森にいた女性の名前はルクリカ。

この街の一番偉い人、スカードルという人物が連れてきたらしい。

「スカードルのことは何となく聞いてたけど・・・ここまで悪評だ

とは思わなかつたわ」

ミレクラが苦笑い（小鳥だから表情はよく分からぬが声の感じからしてそうだと思った）

をした。

「すごい悪い噂多いな」

そう、本当にスカーデルという男の評判は悪かつた。

戦争で見方を殺しただの、国王の座を狙つてゐるだの、罪のない大臣達を殺しただの・・・

とにかく悪評がすごかつた。だが、スカーデルは2年前までは普通の優しい男だつたそうだ。

「何でこんなに悪評になつたのかしら?」

「それは、ルクリカ関連のせいだと思つよ」

「どういうこと?」

「僕の推理だけど、スカーデルという男は操られてるんだと思つよ」「誰に?」

「そこまでは分からぬ。といつか、ミレクラはスカーデルのこと知つてゐるんだね」

僕の言葉にミレクラは、まあね。とだけ呴いた。

「今日は遅いし、何処かに泊まろうよ」

「何処に泊まるんだよ」

「頑張つて探そう!」

ミレクラのポジティブな反応にため息の出た僕だつた。

「・・・何か騒がしいな

「あれじゃない?」

ミレクラが指示した方には人が集まつていた。

その集まつてる方に行くと何やら揉めていた。

「だから謝つただろう!?」

袋を抱えながら、一人の少年が叫んでいた。

「俺様がそんなので許すと思つてんのかあ?」

少年の先には3人の男が立つていた。

ボスらしき男の言葉に後ろの2人が、そうだそうだ！と言っていた。

「・・・あの男、何が何でもあの少年をボコボコにするつもりだな」

「どうするの？助けるの？」

ミレクラが僕に聞いてきた。

「もちろん、ここで見過ごすなんて神に近い者がするものか。ミレ

クラ、

僕から離れてて

「了解！！」

ミレクラは僕から離れて空を飛んでいた。

僕は深呼吸をすると、集団の中心へと歩いていった。

情報収集（後書き）

これからどんな展開になつていいくのか・・・
不安ですが、頑張ります！！

「そこのおっさん、いい加減にしたらどうですか？」

僕は歩きながら3人のおっさんに言った。

「誰がおっさんだ！」

「どう見たっておっさんだる。ま、それは置いといて・・・いい加減してくれませんか？」

「俺様はそこ的小僧がぶつかって来て壺が割れちまつたんだよ！」

「だから、ぶつかったことに関しては謝つただらうー・？」

少年は大声でそう言つた。

「だが、壺のことについては、そっちがワザと落として割つたんだろー!?」

よくありがちなパターンになつてきた。このまま会話が進めば・・・

「なんこと知るかつ！」

と言いながら、おっさん3人は持つていた刀を構えた。

つまり、戦闘態勢に入つた。僕の予想通りすぎて、何か泣けてきた。

「逆恨みは良くないですよー。おっとー！」

そう相手を茶化してみた。すると相手は刀を思いつきり振り下ろしてきた。

そんな感じの会話と攻撃がしばらく続いた。

「ちょこまかと逃げやがって・・・」

相手は剣のことに関して、素人だと思った。

攻撃が单调すぎる。これでプロだつたら世の中の剣士が可哀想だ。

「いい加減、止まれ！」

また、攻撃してきた。僕は空に向かつて高く飛び、宙で一回回り、足で刀の刃を壊した。そして、着地しそのまま軽く相手の顔ぐらいまで

ジャンプし、まわし蹴りを喰らわせた。

「ぐあっー！」

みごとにクリーンヒット。相手は怯えて、覚えてろーとか言つて何処かに行つてしまつた。

「た、助けてくれて、ありがとう」

少年がお辞儀をしながらそう言つた。

「気にすんなつて！僕はレラン。君の名前は？」

「俺はリオン。よろしく。助けてもらつたから、何かお礼がしたいんだけど・・・」

「！だつたら、君の家に今日一日泊まつていいかな？」

少年リオンは僕の言葉に驚いてこう言つた。

「そんなことでいいのか？」

「僕、宿を探してゐるんだけど、なかなかね・・・ダメか？」

「何を言つんだ、いいに決まつてゐるじゃないか！」

「本當か！？」

そんな会話ををしてゐると、ミレクラが僕の肩に止まつてゐた。

「この小鳥も一緒でいいかな？」

「もちろん！」

こうして、泊まる場所は確保した。（リオンは一日じゃなくて、何日泊まつてもいいと言つていた）

* レラン、レラーニア街、リオンの家にて*

「大したお持て成しは出来ないけど、どうぞ！」

中は結構シンプルだつた。といふか結構綺麗だつた。

「お邪魔しまーす」

ミクリアがそう言つた。ミクリアの声は一般の人にも聞こえているらしいが、

この街の人は大して驚いていなかつた。

「リオン、一人暮らしなのか？」

「いや、お袋がいる。体が弱いから寝てるが」

「そうか・・・」

リオンと話していると、奥の扉から誰か出て來た。

「リオン、帰つてきてたのね。・・・あら? そちらの方は?」

扉からこげ茶のロングヘアの女性が出て來た。

「この人は、街で、揉めてた僕を助けてくれた人」

「初めまして、レランと申します」

「僕は女性に向かつて軽く、一礼をした。

「初めまして。私はリストランと言います。この度は息子を助けていただきありがとうございました」

「いえ、別に大したことはしてませんよ」

「僕は少し照れくさかつた。

「レランは、泊まる場所を探してたんだって。泊めていいよね?」

「ええ、もちろんよ」

リオンのお母さん、リストランもあっさりと承諾してくれた。

「小鳥も一緒ですが、よろしくお願ひします」

「レラン! 何よその言い方! 何かムカつく」

ミレクラがそう言って、僕の頭をくちばしで突いた。

乱闘騒ぎと宿と・・・（後書き）

泊まる場所を確保したラン。

この家に泊まって、これから意外なことがおこる・・・かも？
気分転換で作ってる私なので、

これからどうなるか・・・（；、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4535y/>

時の訪問者

2011年11月27日16時57分発行